駒澤大学教育学研究論集　第 32 号　2016 年 2 月

仏教・禅的な人間形成の理念と教師教育

― 教職課程の現状と体験・実習関連科目および教職実践演習のさらなる課題 ―

総合教育研究部 教職課程部門
（北村三子・伊藤茂樹・遠藤司・黒住早紀子
豊田千代子・萩原建次郎・山本敏子 ）

内容

はじめに
Ⅰ．駒澤大学の教員養成の理念からみた教職課程の現状
1．駒澤大学の教員養成の理念とその実現のための基本的方策
2．現状をどう見るか―授業の少人数化と個別指導について
3．現状評価の可能性をさぐる―4 年次後期のアンケートから
⑴アンケートの回答内容
⑵分析
Ⅱ．体験・実習関連科目および「教職実践演習」の現状と課題
1．建学の理念の捉え方
2．「介護等体験指導」（3 年次前期）
⑴事前指導
⑵事後指導
3．「教育実習指導」（3 年次後期）・「教育実習 A・B」（4 年次前期）

(1)事前指導―学習指導案と教材研究
(2)クラス運営上の課題
4.「教職実践演習」（4 年次後期）
5. 深く感じることの意味
おわりに

付記：2014（平成 26）年の「教職課程で学んだ感想」について
資料：
１．大学としての教員養成に対する理念、設置の趣旨等
２．教職課程部門開講科目における少人数クラスの割合
３．4 年次生アンケート「教職課程で学んだ感想」一覧（2011 年）
４．「教職課程で学んだ感想」分類別件数（2011 年）
５．「教職課程で学んだ感想」分類別件数（2014 年）

はじめに

曹洞宗の学林を前身とする駒澤大学は、その研究・教育活動において、仏教の教義と曹洞宗立宗の精神、つまり、仏教の縁起の悟りである「智慧」とそれから発する「慈悲」を社会に活かすことを目指してきた。そうした大学の性格上、教員養成が重視され、開校以来、多くの教育者を世に送り出してきた。そして、大学の拡大とともに教職課程の履修者も増え、今日では、登録時点で 600 名程になっている。

ところで、駒澤大学の求めるものは精神的なものである。しかしそれは、身体化された知となって日々の生活に活かされていなければならない。少なくとも一昔前には、そうした佇まいを感じさせる人物に時折キャンパスで出会えた。現にそれが振舞いとして体現されているならば、「智慧」だ「慈悲」だと言葉にする必要もない。本学の伝統からすれば、そこまで到達するということが本道であろう。

しかし、そうした境地に到達したことは雰囲気としてははっきりと感じられるが、明確な基準があるわけではない。それゆえ、すべての学生の到達目標とすることには馴染まないであろう。それには、誰にも分かりやすい何らかの基準を設定せざるをえない。また、大学は、公的補助金に見合う、はっきり目に見える研究・教育の成果が求められている。また外部へ自己について発信することも求められている。そうしたこともあって、駒澤大学の建学の理念を言語化することによって意識的に共有し、その教育の特徴を誰にも分かりやすいものにすることが目指されている。

教職課程も同様である。2010（平成 22）年に本学の教職課程は文部科学省の実地視察を受けた。教職課程部門はそれを機に、建学の理念に基づく教員養成の理念を明確化した（資料１）。新たな理念を掲げたというより、教職課程部門の先輩教員達の間に雰囲気として存在していたものに言葉を与えたのである。しかし、そのことによって、これまでのように一人ひとりの創造的な教育活動を尊重しつつ、さらに協力関係を深めていけるのではないかと考えている。

本論文は、そうした協力関係を深めるための一つの試みとして、本学の教員養成の理念に基づく教育実践の達成度を確認し、駒澤大学らしい教員養成のためにさらに留意すべきことを探ろうとするものである。

Ⅰ．駒澤大学の教員養成の理念からみた教職課程の現状

1．駒澤大学の教員養成の理念とその実現のための基本的方策

本学の教職課程の目標は、複雑化する現代社会の教育課題に対応できる力量を自ら培っていけるような資質をもった人材を育成することである。この目標は、建学の理念に基づき、同時に文部科学省が求める教員養成の目標や教育職員免許法等の法令に準拠して設定されたものであり、本学では仏教・禅の精神に鑑みて、これを「鋭敏な感受性と柔軟な知性を備えた人材の育成」と言い換えている。

教職課程部門では、この目標を掲げる教職課程のカリキュラムのうち、教科教育法の一部を除く「教職に関する科目」を担当している。また、社会教育主事講座および学校図書館司書教諭講座も教職課程部門の責任で開講している。

教職課程の開講科目は、教育職員免許法に基づいて、1 年次後期～4 年次までにわたり、教職への入門的な内容から始まり、教育の原理的・方法的学習を経て、実践的学習へと進むように、段階を追って構成されている。

こうした教職課程のカリキュラムの実施にあたって、本学では、従前から、理念に合致した総合的な力量を形成するために、他者との対話力や身体的・言語的表現力を高めることを特に重視してきた。その具体策として、体験・実習系の授業科目に重点を置き、それらを少人数の通年科目として設定してきた。また、個別指導にも力を入れてきた。教育職員免許法改正に伴い、2010（平成 22）年度入学生から、4 年次後期科目に「教職実践演習」が追加されたが、基本的な考え方には変化はない。

2. 現状をどう見るか—授業の少人数化と個別指導について

駒澤大学は、複数の学部からなり、免許の種類も多岐にわたっている。教職課程の履修者も多く、4 年次の実習生の数も 250 名を超えている。教科に関わる科目はそれぞれの学部が担当しており、教職課程部門に所属する教育諸科学の専門スタッフだけでなく、専門や所属を異にする多くの専任・非常勤教員が教員養成に関わっている。そのため、教職課程の教育を担う教員間の相互理解や共通認識を育てることが大きな課題としてある。

教職課程部門が主管する科目群について現状把握を試みたい。

仏教・禅に基づく建学の理念は質的なものであり、教職課程の履修者がどの程度それを身につけ、それに従って行動できるようになったかということ自体は、客観的に測定することは不可能なことである。しかし、そのための基本的な方策として考えられてきた少人数クラス化の達成度は数値化が可能

である。本学の教職科目もかつては大規模教場が中心であったが、文科省の方針や学内の理解もあって、学生が取り結ぶ関係の質を向上させる上で適したクラス規模への転換が徐々に進んできた。その達成度を見てみると、2014（平成 26）年度の 40 名以下のクラスは、教職課程部門主管科目の開設コマ数全体の 60.7%を占めるまでになっている。ちなみに、2007（平成 19）年度は、43.6%である（資料２）。現在では、体験・実習関連科目だけでなく、講義科目でも 70 名定員とする科目が中心になっている。これらから、「鋭敏な感受性と柔軟な知性を備えた人材の育成」に不可欠な他者との対話力や身体的・言語的表現力を高める機会を本学教職課程履修者に保障するための学習環境は、概ね整えられてきたと言うことができそうである。

個別指導については、次のような配慮がなされている。

体験・実習関連科目の各担当教員が日常的に履修生の進路の悩みや体験・実習先への派遣等に関わる各種面談に当たっている。教育実習の事前準備としての学習指導案の作成や模擬授業等の個別的な学習指導については、授業時間外にも随時行っている。

また、介護等体験日誌、教育実習ノート、社会教育実習ノート、各種レポート等を通して、体験・実習先での学生の学びの様子を把握することで、各学生の特性に応じて指導するように努めている。さらに、教育職員免許法改正による 2010（平成 22）年度入学生からの新カリキュラムへの移行に伴い履修カルテを導入したが、これも、1 年次後期～4 年次の継続的な個別学習指導の強化に役立っている。

3. 現状評価の可能性をさぐる—4 年次後期のアンケートから

こうした日常的な様々な営みの効果を客観的に評価することは難しいが、まったく手掛りが無いわけではない。教職課程全体に対する履修者の評価がある程度分かる資料がある。4 年に亘る教職課程の学習を通じて感じたことを尋ねるアンケートである。

2011（平成 23）年 11～12 月に行った「平成 23 年度　教員採用試験並びに教育実習等に関する調査」を取り上げてみよう。特にこれを選んだのは、教職課程で学んだ感想を自由に記述させる項目があるからである。

アンケートに関する基本情報は以下の通りである。

❒基本情報

名　　称　　「平成 23 年度　教員採用試験並びに教育実習等に関する調査」
実 施 者　　駒澤大学　総合教育研究部教職課程部門・教務部教務課教職係
対 象 者　　「教育実習Ⅰ・Ⅱ」履修者（4 年次生・科目等履修生）
実施時期　　平成 23 年 11～12 月

❒アンケートの回答率

2011（平成 23）年度教育実習終了者数　　265 名
アンケート回答者数　　195 名（73.6%）

(1) アンケートの回答内容

まず、「教職課程で学んだ感想を、自由にお聞かせください」という質問項目に対する回答を次のように分類した（全回答は資料 3 に掲載）。

A：大変だったが、授業が充実していて楽しかった。学部では学べないことが多く、自分にとって有意義だった。本当に為になった。普段の学生生活では味わえないことを体験できた。 ⇒39 件

B：理論から実践まで幅広い分野から学べてよかった。⇒63 件　特に次のような点で。

・教育全般のこと、教育の重要さ、子どもを取り巻く教育の現状、教育現場の状況等。

・人や心の成長、若者の居場所、障害を抱えていることについて等。

・学校教育の現状とあり方、学校と塾とのやり方・考え方の違い等。
・教師の仕事について、教師の大変さ・責任・やりがい・楽しさ、教師になるための道のりの険しさ、授業の大切さ、人前で話すことの難しさと事前準備の大切さ、教師という立場から子どもと関わる技術、教えることだけが教職者の役割ではないこと等。
・人に物事を教える（何かを伝える）ことの意味や大切さ、素晴らしさ、難しさ、喜び等。
・教師になるために必要な基本的な知識や心構え、技能等。

C：教師になりたいと思うきっかけをつかんだ。教師を目指すために自分に何が足りないかを理解できた。教師という職が自分に合わないことを知ることができた。⇒5 件

D：教育実習を通して、二度とない貴重な経験をすることができた。⇒14 件

E：講義だけでなく、実践的な内容の授業（学習指導案の作成、模擬授業等を含む）が多くてよかった。⇒6 件

F：様々な講義を履修でき、視野が広がった。「教育」や「教師」に対するイメージ、考え方、意識が大きく変化した。今までとは違った観点から物を見ることが出来るようになってよかった。⇒16 件　特に次のような点で。
・様々な観点から学ぶことができ、授業の種類、先生も多くて興味が深まる一方だった。もっと学びたいと思った。
・教育と一言でいっても、様々な面からのアプローチがあって、将来教員にならなかったとしても素晴らしい経験になった。
・教育の切り口から、世の中の社会状況、変化、諸問題などを考えたり学んだりでき、視野が広まった。
・指導の仕方に正解はなく、一人一人の意見が違うものなので、他の人の意見を聞くことで自分の視野が広がった。
・教師に対する意識が大分変わった。モンスターペアレンツになることはないだろう。

・教育という漠然とした分野が、少しではあるが様々な視点から考えられるようになった。
・教育に対する考え方、姿勢というものを、自分の中で改めて構築するキッカケとなった。
・普通の授業とは異なって、「なぜなのか？」という、自分で考える力がより身に付いた。

G：今まで教えられる立場だったが、教える立場として考えることができるようになったのでよかった。⇒3 件

H：人のつながりの大切さ、人間関係のあり方を学べた。コミュニケーション力が身に付いた。生徒のために考え、行動することの大切さを学んだ。⇒23 件　特に次のような点で。
・人とのコミュニケーションの取り方や接し方など、介護等体験や教育実習で様々な人と接して、いろいろ考えさせられた。
・教科指導と生徒指導で生徒とコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことが重要であることを学ぶことができた。
・他の授業より自由に発言できる機会が多く、クラス内のコミュニケーションがとりやすかった。
・人はコミュニケーションをとることで成長できるので、人との関わりを決しておろそかにしてはいけないと学んだ。
・人に教えることだけでも難しいが、教師はそれ以上に生徒の為に動いている。良い経験だった。

Ｉ：プレゼンテーション能力が身に付いた。多くの人の前で話せるようになった。⇒3 件

Ｊ：自分と向き合う良い機会になった。教職課程で学び、自分自身が人間的に成長できたのではないかと思う。⇒6 件

K：生きていく上で有意義なことを学べた。教員になるためだけではなく、この先の社会人としての大切な事を学べ、とても勉強になった。人との

触れあいや物事の伝え方等、教職以外でも活かせる内容について学習でき、一般企業で働くにしても役立つことを得られた。⇒21 件

L：クラスの交友関係、教師との関係が良好でよかった。⇒12 件　特に次のような点で。

・学部の授業より興味を持てる授業が多かった。

・色々な学部の人と知り合えて、交友関係を広げることができた。

・学科での授業とは異なり、様々な学科の学生と共に学ぶことで、新しい価値観を共有でき、大いに勉強になった。

・模擬授業で、実際の授業を想定し、授業を作り上げることができたのが、とても有意義だった。実習後の報告会も色々な人の様々な経験や意見を交換することができて、とても参考になった。

・親身に相談できる先生が多かったのはありがたい。（教職を目指す）友人や、支援して下さる先生方や職員の方に会えてよかった。

X：教職課程への要望その他の感想 ⇒27 件　特に次のような点で。

・もっと実践的な授業が多い方が為になると思った。

・教員免許や教員採用は複雑なので、教員採用専門のキャリア・カウンセラーを設置してほしい。

・教員採用試験に密着した内容も扱って欲しかった。

(2) 分析

何らかの形で教職課程での学びが有意義だったとする回答が 82.6％で（「それ以外」の 17.4％の内、分類 X「教職課程への要望その他のみ記載」は 10.8％、未記入は 6.7％）、高い満足度を示している、と考えてよいであろう。授業が楽しかった、学部で学べないことが多く自分の為になったとする分類 A が 20.0％、教育や教職に関して学んだ様々な分野の具体的内容に触れて、良かったとする分類 B が 32.3％、教育実習が貴重な経験となったとする分類 D が 7.2％、等となっている。

特記すべきは、授業を通して視野が広がり、今までとは違った観点から物を見ることが出来るようになったことを自覚的に取り上げる分類Fが8.2%、人との関わりの大切さを学び、コミュニケーション力が身に付いたことを挙げる分類Hが11.8%を占めることである。分類Fには、「普通の授業とは異なって、「なぜなのか？」という、自分で考える力がより身に付いた」ことを明記する回答があった。本学教職課程部門が教育目標に掲げる「複雑化する現代社会の教育課題に対応できる力量を自ら培っていけるような資質」が、3 年半に及ぶ教職課程のカリキュラムの中で着実に育っていると考えてもよいのではないだろうか。

また、分類Hに見られるような他者（子ども）の視点に立って、他者とコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことを大切に考える「鋭敏な感受性」についても同様のことが言える。

このように、仏教・禅の精神を建学の理念とする本学教職課程のカリキュラムの編成・実施方針は成果をあげていると言える事例がいくつかあることは、確認できる。そこから他の学生に対してもそれなりの効果をあげていると判断しても牽強付会とは言えないのではなかろうか。さらに、6.2%ある分類Lの回答からは、少人数のクラス編成と各教員（さらには職員）による個別指導が学生の取り結ぶ関係に豊かさをもたらしていることがうかがえる。

もう一つ、教員養成に直接関わる分類D、分類Gの回答の他に、自分と向き合う良い機会となったと振り返る分類Jが3.1%、教員になるためだけではなく、この先の社会人として生きていく上で大切なことを学べたとの感想を述べる分類Kが10.8%あることにも注目したい。本部門の教育が、教員養成に限定されず、教職課程履修者それぞれの人生と深く切り結び、彼等が将来的に広く社会の様々な場面で求められている次世代の人間形成（子育てや後継者養成等）に大きく貢献するであろうことが示唆されている。それとは逆に、教育実習をきっかけに、あるいは、他の教員免許の取得後や一度社会経験を積んだ後に教員を目指したいと考える学生が少なからずいる。このこ

とも本学の特色である。

実践的内容の授業が多くて良かったとする回答（分類 E）がある一方で、教職課程への要望（分類 X）として、もっと教科教育法や実習直前の準備の充実、グループ・ワーク等、より一層の実践的な授業を望む声も 8 件あった。こうした対立する回答をどう見るかは、今後の検討課題の一つであろう。また、教員採用専門のキャリア・カウンセラーの設置を求める回答が 1 件あった。これは、実習指導室の開設として本部門が以前から望んできたことでもある。その他、教員採用試験対策への期待が 1.5%の 3 件寄せられているが、この点に関しては 2011（平成 23）年度より教職課程部門、教務部教職係、キャリアセンターの三者が連携してキャリア教育を推進するという形で、教職を希望する学生に教職に関する情報の提供と学習支援を行っている。

ところで、ここで分析の資料とした教職課程履修生の感想と、レポートや普段の会話を通じて教職課程部門の教員が日ごろ把握している履修者の思いとの間には、大きな開きは認められなかった。質問項目は簡単なものだが、「教員採用試験並びに教育実習等に関する調査」は、現状把握の手段としては一定の有効性が認められるのではないだろうか。より広い範囲の反省材料を得るためには、実習校や教育委員会との連携などに関することも一定のサイクルでアンケート項目に加えるということも、有効かもしれない。

Ⅱ．体験・実習関連科目および「教職実践演習」の現状と課題

1．建学の理念の捉え方

本論文は、先述のように、教職課程の現状を踏まえた上でこれからの教師教育の課題を探る、ということであるが、同時に、共著論文を書くことで教職課程部門の 7 名の専任スタッフの協力関係を深める、ということも狙いとしている。そのためには、対象を考察する観点をある程度共有しなければならない。そこで、「鋭敏な感受性と柔軟な知性を備えた人材の育成」の基にあ

る建学の理念に立ち戻ることにした。そしてそれを、以下のように整理した。

建学の理念として言及される「慈悲」や「智慧」という言葉が指し示すものは、大学教育が通常内容としている科学的な概念や合理的判断、認識などとは別種の「知」のあり方である。したがって、建学の理念を大学教育における教師教育に活かすためには、両者を明確に意識し、その上で両者の相互作用のあり方が考えられなければならない。そうしてこそ、異質な知の相互作用による新たな知の創出の可能性が開かれるであろう。

仏教・禅的観点からは、近代人の認識する物事の世界は虚構である。たとえば瞑想などの、身心が統合されたより深い意識レベルで捉えられる世界こそが現実である。生命現象はもとより、物事はすべて、絶えざる変移の中に、また分節できない無限の多様性からなる繋がりの中にある。「体験（純粋経験）知」とは、身心の全てが関わって生起するものであり、知的理解を超えて、そうした深い現実の位層にまで届くものである。

駒澤大学らしい教員を育てる上で必要なのは、こうした古くからあるもう一つの「感知」の様式の存在をまず認めることであろう。しかしそれは、新しく、非日常的なものを身につけるということではない。というのは、これらは意識されることが少ないだけで、私たちの誰にも起きていることなのである。クオリアの感知、イメージ、直観、想像、洞察、インスピレーションといった、いわば身体化された総合的な知、の一群がその系列に入るのである。仏教・禅的な観点を身につけることは、こうしたことを意識的に理解し、自己省察の糧とすることである。

一方、学問的世界は、何らかの意図のもとに現実を切断して作られる非時空的な概念の網の目からなるものである。普遍的であることが追求されるが、それは前者の立場からすれば、非存在であるということである。また、前者は受容的で共感的であるのに対し、能動的、意志的、目的的、分析的、技術主義的である。

このような、モノゴトを分析的に捉える学問知の必要性は自明であり、

現代社会はこれによって成り立っている。しかし、そのために前者の知の必要性は見えにくくなっている。そしてこのことは、現代の人間が引き起こす問題の根底にあることなのではないだろうか。そうだとすれば、前者の知を自覚化し、後者の知との調和をはかること、つまり、両者を追求するということに、本学の存在意義を見出すことができるのではないだろうか。

こうしたことを踏まえて、教職課程部門は学生を体験や実習に送り出し、事後指導をしている。また、教職課程の最後に行われる「教職実践演習」においても同様である。もっとも、授業はこれまで各教員の自由に任されており、上記の内容は今回初めて意識的に確認された。以下は、そのためになされている配慮の説明と、今後の課題をまとめたものである。

2.「介護等体験指導」(3 年次前期)

(1)事前指導

何らかの体験をする場合に、自然の成り行きのものであれば、それと出会う内的準備は自ずとされている。しかし、体験がカリキュラムとして組まれている場合には、その必然性を認識させ、それを自ら欲するように仕向ける配慮が必要になる。そのためには、事務的な情報を正確に伝達するだけでなく、障がい児や高齢者との付き合いが無い学生たちの不安を除くことも必要である。

まず、事前学習としては、社会福祉施設・特別支援学校の目的や組織の概要、利用者・生徒の様子、支援者としての職員・教員の仕事などを学ぶ。その上で、過去の介護等体験の具体的内容を知る。さらに、中学校の通常級の教員として生きることとの関係を考える。

また、車椅子体験、アイマスク体験、指文字や手話の練習等の体験は、他者への想像力を高めることにもなる。たとえば、「アイマスク体験」は、目の

不自由な人と一緒に歩くとき、どうすれば相手を助けることになるのかを考える機会になる。こうした経験を重ねれば、相手のことを思いやる想像力が増すだろう。学校の中で障がいのある子どもが何を困ったと感じるか、またそこに居合わせたらどうしたらよいかを、いくつかの事例を取り上げてグループで検討することも有効だろう。

介護等体験では、介助をするだけでなく、会話をし、レクリエーションを企画し、生徒と手をつなぎ校外を歩くことなどもする。もし事前に、出会いを楽しみにできるようになれば、こうしたすべてから深く学べるだろう。

しかし、介護等体験で求められるものは、他者に関心を持ち、交流する一般的な力を基礎としているのである。それゆえ、他人とかかわることを喜びと感じられる「柔軟な心と体」、言語的・非言語的な表現の豊かさなども、日ごろから培っておきたい。事前指導のグループ・ワークには、そうした効果が期待される。また、自然との関わりも大切であるが、駒沢公園などを利用した自然体験学習も一定の効果が期待できるだろう。

(2) 事後指導

介護等体験によって人間観、教育観、世界観が 180 度変わったと感じる学生が多くいる。気乗りがせず、いやいや介護等体験先に向かうが、社会福祉施設で 5 日間、特別支援学校で 2 日間の体験を終えると、これまでとは全く異なる世界が開かれてくるのである。また、教師というのは、授業を通して、子どもに一方的に知識を授けるものだと思っていたが、そうではないことに気づくなど、様々な気づきを語る学生がいる。具体的な形としては、介護等体験を機に特別支援学校の教員を目指すようになった学生や、障がいのある子どもたちを放課後にサポートする NPO 団体に就職した学生がいる。

しかし、他方で、自分が想定していたのとは全く異なる他者と出会い、思っていたようにも振舞えず、苦しい思いをする学生もいる。事後指導は、そうした学生にこそ必要である。それを契機に、自分に不足していることに気

づき、どうしていったらよいかを考えることが重要だ。同じような学生と交流すれば、自分を変えていく勇気も湧いてくるだろう。

もちろん、主観的に楽しいと感じられた体験も重要である。それは、本学の建学の理念にもかなっているだろう。本稿の初めに触れたが、「慈悲」は、縁起を悟ること、つまり「智慧」の体得の結果、自然に溢れ出るものである。豊かな体験は、そのような、慈悲が自然に溢れ出る自己の形成に通じるであろう。

私たちはこの世界の中に溶け込んで、体験を通じて人として生きて行く上で必須なものを学ぶ。しかし、成長とともに思考が発達すると、自他を区別するようになる。自他の違いが意識されるのである。そうなった後でも真に体験から学ぶことができるためには、他者との関係に幼児のように素直に身を置くことができなければならない、ということが仏教・禅の教えである。

それは、「体験から学ぶ」というより「体験することで自ずと気づく」ということである。たとえば坐禅のように、体験はそれ自体が全身を持ってする知である。体験は意識されるものより大きく深いのである。そのような意識を越えたところで生成する知は、「自ずから」という形にならざるをえない。そのような知を大切にするのである。

「介護等体験指導」は半期科目であり、しかも、7 月以降に介護等体験に行くので、授業は準備学習で終わってしまう。事後指導は個別にはできても、介護等体験をどのように教育実習へとつなげていくのかを受講者全体で考え合うことはできない。ましてや、北欧諸国の実践例に学び、教育と福祉との関係をどのように考えていったらよいのか、私たちが今後目指すべきより良い社会とはどのような姿なのか、などをじっくりと時間をかけて議論することはできない。そうできる条件さえあれば、学生の体験はさらに豊かな広がりもつことになるだろう。

3.「教育実習指導」(3 年次後期)・「教育実習 A・B」(4 年次前期)

これらは、従来、「教育実習Ⅰ・Ⅱ」（4年次通年3・5単位）として開講していた科目を 2 つに分けたものである。教育実習の事前指導は、「教育実習指導」と「教育実習A・B」の前半に行われる。

事前学習としては、教育実習に臨むにあたり必要な知識や心得として、①教育実習の内容と教育実習生としてのマナー、②教科外指導（生徒指導や部活動等）や校務分掌を含めた教員の仕事内容、③単元指導計画・学習指導案の書き方等、を学ぶ。

教育実習後は実習の報告、レポート作成などを通じて、今後の自分の課題を整理する。しかし、半期科目であるため、「介護等体験指導」の場合と同様、事後学習を深めるという課題は4年次後期の「教職実践演習」に持ち越される。

(1) 事前指導—学習指導案と教材研究

事前学習の上記の3つの中で教員が最も力を入れているのが、学習指導案の作成である。実際の授業に必要なことはもちろんだが、目指す授業を指導教諭に伝え、指導を受けるためにも必要である。本学では教科教育法でそのための学習をすることになっているが、十分でない場合には「教育実習指導」で補い、全員が作成できるようにしている。

「教育実習指導」での学習指導案作成の練習をする場合、標準的なフォームを示すことが多い。1時間の授業について、目標、学習内容（テーマ）、生徒の学習活動、教師の活動・指導上の留意点等を、導入・展開・まとめという時間軸に沿って整理したものである。全案（細案）では、これに、単元の指導計画、指導目標、教材観、生徒観、指導観、観点別の評価規準等も加えられる。

指導案を書くときに重要なのは、生徒の顔をどの程度思い浮かべることができるかということである。生徒を思い浮かべながら、分かりやすく、興味が高まり、豊かに考えさせるにはどうするかを工夫するのである。

導入部に「前時の復習」とだけ書かれている実習生の指導案をよく見かける。しかし、それだけでは授業の計画にならない。その場で適切に判断するだけの力は学生にはない。たとえば、国語の教材で、主人公の心情の変化を追うことが目標となっている時、「前時の復習」は、前時に読み取った主人公の心情を確認することであろう。そのために、前時のノート、プリント等を確認させる、前時の内容についての発問をする、文章の重要な箇所を再チェックさせる等々、それぞれの生徒に適した復習の方法を教師はあらかじめ考えておかなければならない。

また、授業には、教師の直接的な働きかけがない状況もある。たとえば、生徒同士が話し合いをしたり、文章を書いていたりする時である。しかし、教師はその時にも、授業者としての「自己」はどうあるのが生徒にとって最も良いことなのかを考え、行動しなくてはならない。そうしたことについて、指導案では書ききれないことも含めて考えておかなければならない。

指導案の作成過程には、論理的な思考力だけでなく、想像力やひらめきが必要だ。たしかに、「思い浮かべる生徒の顔」といっても、実際のものではない。これまでに会った同じ年頃の子どもや、過去の自分についての記憶などから引き出されるものである。だから、指導案の具体性は限られたものにならざるを得ない。それでも、そうした作業を試みることが、是非とも必要である。それは、授業実習だけでなく、生徒との関係でも良い体験をもたらすだろう。

ところで、体験学習、アクティブ・ラーニングといった生徒の活動を中心に置く授業が近年求められている。学習指導案に一定のパタンがあるという前提でこれまで考えて来たが、特に中学校は随分前から講義型の授業は敬遠されるようになっている。大学で学ばれる指導案の書き方では対応できなかったという学生も出てきている。そうした傾向はこれからますます強まるだろう。これまで述べて来たことは基本であるが、同時に、新しい傾向にも対応する必要がある。そのためには、もう少し前の段階から見直す必要がある

かもしれない。

形式は本来、扱う内容に最も相応しいものでなくてはならない。それは、扱うべき内容が教師の心の深くまで届いている、つまり、教師が心からそれを他者と共有したいと思うことで自ずと見えてくるものであろう。しかしそれは、ベテラン教師について言えることで、学生に求めても無理であろう。そのため、これまでに形成されてきたものを与えるわけである。しかし、それにも問題がないわけではない。たとえば、これまでの形式の指導案での授業では、「山」がないと批評されることがある。「山」は、内容との深い関わりから生まれるものであろう。教科書に書かれているものは、概念的で一般的である。教師という具体的存在を媒介にして初めて、授業は生き生きとしたものになる。幅広く研究を重ねて、それを自分の心に届くものにするのが、教材研究に他ならない。教材研究は学問と繋がりが深いが、同時に、生のリアルに届くものでなければならない。

(2) クラス運営上の課題

学部・学科別の編成となっている前期科目の「介護等体験指導」の後に組まれている「教育実習指導」のクラスには、前期の受講者に、高等学校教諭1種免許状のみの取得をめざす受講者が加わる。

教科指導上、以下のようなことについては是非経験しておいてほしいのだが、「教育実習指導」の授業が始まる段階でかなりの個人差がある。

- 介護等体験やボランティア活動、アルバイト等を通して、幼い子どもたちや難しい思春期の 10 代の子どもたち、人生の大先輩等々、老若男女様々な世代の人びとと実際に触れ合ったことがある
- 人前で話（授業での発表を含めて）をしたことがある
- そのために、本を読んだり、資料にあたって調べたりしたことがある
- さらに、それらを自分なりに消化して、聞いている人がわかるようなレジュメを作成したことがある

・授業づくりに取り組み、学習指導案を作成したことがある
・実際に模擬授業をしたことがある

最後の二つの項目については、ことに社会科系の免許を取得しようとする受講者の場合に問題となる。目指す免許の種類や数にかなりの差があることもあって、3 年次前半から始まる教科教育法の学習に大きなばらつきが出てしまう。社会科系の教科教育法のクラスは複数あるが、多種の免許取得を目指し教科教育法での学習が十分という学生もある半面、学習指導案を作成した体験がないどころか、それがどのようなものか、聞いたこともなければ見たこともないという学生もいる。模擬授業の体験ももちろんない。

教科内容に関しても、地理・歴史・政治・経済等について基本的なことを良く理解していると言える学生はごく少数である。自分の専門領域はともかく、それ以外の教科については、基本的な知識・理解さえ欠いていることが多い。中には中学校の教科書レベルの理解も覚束ない学生もおり、実習校の指導教諭から教材研究の不十分さを指摘されることが多い。その土台となる学問的訓練がなされていないのである。本学学生には、他者と共感的、対話的に関わることのできる豊かな感受性をもった学生が多いと見られているが、本学の教員養成の理念が求めるのは、学問知と深い体験知との統合である。それができるためには、学問知の基本をしっかり身につけていなければならない。その際、その限界についても自覚していることが望ましい。それがあってこそ、体験知で補う必要も納得できるのである。しかし、学問知の理解については、それよりはるかに低いレベルにある学生が多い。抜本的な対策を考えなければならない。

このように、スタート時点の履修者の経験・力量にはかなりの違いがあるが、それを前提に、各人がともかく失敗を恐れず思い切って「やってみる」ということをさせたい。その際、参加者が相互にアドバイスし合うことを重視する。そして、失敗から新たな創意工夫が生まれることを体験させたい。具体的には、そのためには、①全員が学習指導案を作成する。②学習指導案

に基づいて、自らの授業の構想を皆の前で話す。③学習指導案に基づいてグループで模擬授業をする。②、③については、その後に全員で意見交換をする。グループ分けをする場合、学習指導案の作成や模擬授業の未経験者だけにならないよう配慮する。必要に応じて、授業外の個別指導も行う。

こうした 3 年次の準備学習を経て、4 年次前期の「教育実習 A・B」では、全ての学生に、学習指導案の作成と 50 分ないし 30 分の模擬授業を課すことができるようになる。実習校の校種、実習科目、実習期間を勘案してグループを編成し、グループごとに、模擬授業とその検討を行わせるのである。その際、同時に使える複数の教室の確保が必要になる。

4.「教職実践演習」(4 年次後期)

本学教職課程では、2009（平成 21）年度入学生までは「教育実習Ⅰ・Ⅱ」と「介護等体験」は通年授業として実施してきた。簡単に事前指導をするだけで、介護等体験や教育実習に学生を送り出していた大学もあった中で、本学教職課程が事前指導のみならず、事後指導をしっかりとやってきたのは、「身体化された総合的な知」を大切にしてきたからである。新カリキュラム移行後、「教育実習Ⅰ・Ⅱ」を分断して、新しく後期に「教職実践演習」が導入される形にはなったが、基本的な考え方は継続されている。

しかし、これまでと違って、介護等体験も教育実習も事後指導の時間が十分取れなくなった。そのため、その一部が、最後の科目である「教職実践演習」でも扱われる必要が出て来たが、それは「教職実践演習」の趣旨でもある。文科省によれば、「教職課程の他の科目や教職課程外での諸活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するもの」であり、「全学年を通じた『学びの軌跡の集大成』として、「将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、そ

の定着を図る」（文科省「教職実践演習（仮称）について」）ものである。

また、「教職実践演習」は「教職生活をより円滑にスタートする」ためのものでもあり、学校や教育委員会との連携協力が求められている。それゆえ、本学の「教職実践演習」では、授業時間外に「特別授業」として 2 回、現職教員から直接学ぶ機会を設けている。また、教育委員会や学校の協力を仰ぎ、学生が児童や生徒と接する機会を持ちやすいよう配慮している。

「教職実践演習」は半期科目なので、その盛りだくさんの内容を短期間に扱うための工夫が必要である。「特別授業」もその一つだが、教育実習の体験をもとにして授業内容を構成することが有効であろう。教育実習では、それまで学生が学んできたことが有機的に統合されているかどうかが試される。学生が大学の授業でそれなりの知識や技能を得ていたとしても、それらが断片的なものであれば、ほとんど役に立たない。様々な対象、課題等に出会い、真剣に向き合う中で、そうした知識や技能の意義を納得している必要がある。つまり、学生自身がまさに体験として、苦労して身につけたことだけが、生きた知として、その教育実践を支えるのである。

「教職実践演習」と並んで導入された「履修カルテ」にも、学生に自分の課題を自覚させるための問いかけがある。しかし、教育実習の体験は、さらに強く、学生一人ひとりに、「将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚」させることができ、また、その自覚をもとに、「不足している知識や技能等を補い、その定着を図る」ことへの動機づけを与えることができる。「教職実践演習」の内容として例示されている、役割演技（ロール・プレイング）や事例研究、現地調査（フィールド・ワーク）、グループ討論、実技指導等も、学生各人の教育実習での体験と深く結びつくことによって初めて、さらに確かで、よりよく統合された力を一人ひとりの内に育むことができるのである。

本学の「教職実践演習」は、国語・英語とそれ以外（社会・地理歴史・公民・商業・宗教）のように、取得予定免許に応じたクラス分けをしており、

それぞれの授業担当者が履修者数や特性に応じた進め方をしている。そこでの諸テーマは主に担当者が設定するのであるが、概ね前期に終了する教育実習についてのレポートや振り返りの話し合いを手がかりにしている。

その際、たとえば、「教育実習において最も心に残り、かつ、自分自身にとって今後の大きな課題ともなりうる体験を一つ取り上げてテーマ化し、深く省察する。そのテーマに関わる体験を想起し、できる限り具体的に詳しく叙述した上で、感じたことや考えたこと、悩んでいること、疑問に思っていること等を率直にまとめる」などの指示をする。教育実習での様々な体験について深く振り返り、思索を重ねて理解を深めていくことは、本学の目標である「鋭敏な感受性と柔軟な知性」を育成する上で欠かせない。

そして、そうした課題に学生たちが協力しあって自ら取り組めるように、グループでの事例研究や討論を行う。併せて、適宜、クラス全体に向けた発表（研究発表、模擬授業、ロール・プレイングなど）を組み込み、それらを通して、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項　②社会性や対人関係能力に関する事項　③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項　④教科・保育内容等の指導力に関する事項　という「教職実践演習」に盛り込むべき項目が満たされるように配慮する。

「教職実践演習」のクラスの運営上の問題としては、卒業後の進路がある程度決まっている時期の授業なので、教員志望の学生とそうでない学生との意識差、授業への関心の度合いの違いが大きいということがある。教員志望ではない学生にも意義を感じられる時間となるような工夫が必要である。

また、テーマの選び方に学生の所属学部や学科による関心の違いが感じられることがある。たとえば、大学での専門が免許取得予定教科に直結している場合には教科指導に、そうでない場合には、対人関係能力や生徒理解、生徒指導に関心の重点が置かれるということがある。後者の場合は、そのこと自体に関心があるというよりも、教科指導に自信がないという場合がある。教科に関する勉強が大学受験で終わっており、教壇実習を形だけ乗り越える

のがやっと、というケースもままある。その解決は、短期に達成できるようなことではないので、かなり困難である。

学生主体での授業を進めるとしても、できるだけバランス良く学べるよう配慮する必要がある。また、学生の目には入りにくいが、教員には大事だと思われるテーマや文献はいくつもある。時間の許す限り、教員の経験からも学んでもらうことも必要だ。

とりわけ本学の目指す教員像に関して、それは当てはまる。総体的に見て、「モノゴトを分析的に捉える学問知」が十分とは言えないが、教科教育について強い関心を寄せる学生の中にも、幼い頃から受験勉強をしてきたためか、「身体化された総合的な知」が欠けているように感じられるケースがある。その場合、そうした「受容的で共感的な知」が存在しうるということに本人が気づかなければならない。

そのための工夫の一つとして、たとえば、津守真『子どもの世界をどう見るか―行為とその意味』（NHK ブックス）などの、幼い子どもとの関わりを描いた実践記録をとりあげる事も有効であろう。そこに描かれる幼児の世界や関係性を、自己の内なるものとして感じられるかどうか、学生に問いかけるためである。他の受講者と一緒にそうした文献に触れれば、自分への気づきはさらに増すであろう。

学生によっては、「モノゴトを分析的に捉える学問知」が不十分でも、「イメージ、直観、想像、洞察、インスピレーションといった、言わば身体化された総合的な知」が活き活きと働いているというケースもある。そういう場合はもちろん、前者をきちんと身につけさせなくてはならない。それが大学教育のそもそもの使命であったはずである。

5. 深く感じることの意味

教職課程は教員養成が目的なので、どうしても、教育の成果を短期間に出そうとして、学生を見る目も短期的になりがちである。しかし、仏教・禅の

世界はそれとは違った時間のスケールやリアリティ(現実観)を持っている。それは、常識的な世界や概念的世界の背後にある、万物が絶えず関係を結びながら変化しつづける、「生きられている」世界である。その世界と出会うことによって人は人生の豊かさを味わう。そうした出会いの契機は何気ない日常にも含まれている。

人間の生きる世界は、唯一無二の時間と関係に溢れている。まったく同じ人とまったく同じ瞬間を過ごせることは二度となく、新しい出会いのたびに新しい発見が得られる可能性がある。言葉でのコミュニケーションもあれば、言葉を介さないコミュニケーションもある。人と人の関係で成り立つ学校現場は、このような出会いの宝庫である。

介護等体験や教育実習を終えた学生は、行く前よりも生き生きとしているように見える。特に教育実習後は、他者と接する態度にも余裕が生まれ、大人らしい艶やかささえ感じられることがある。そして、その報告の端々にも、他者と出会えた喜びが滲み出ている。こうしたことはすべて、良い実習ができたことの指標となる。科学的・客観的な評価ではなく、長年にわたって磨かれた感受性による評価であるが、こうして評価されるものの価値も否定しがたい。

「他者と触れあえた喜び」も、教員が学生の変化として感じることも、実体として示すことはできないが、当事者には「ある」としか言えないものである。「実感する」とは、頭だけではなく、身（心）をもって知るということであり、他ならぬこの自分が、何かとの深い出会いをしたことを意味する。それは、人間の意識では捉えきれない世界の深度を認め、そこにリアルな世界を見る仏教・禅的世界観に親和的である。

学生はそうした世界観を自覚しているわけではないが、介護等体験や教育実習では、人と人との深い関わり、すなわち意識にのぼらないような深いレベルでの身体と身体との交流、換言すれば、互いの生命の交流ともいえるようなものを体験し、喜びを見出しているのであろう。学生は、その体験を通

して、「他者と関わる」とはどういうことかについて「摑めた」という実感を得る。そこから生まれる自信が学生を生き生きとさせているのである。

体験知と関わる体験・実習の意義は、まさにそうした点にあるだろう。「出会う」という他者との確かなつながりの心地よさが感じられる体験が得られることを期待したい。このつながりの実感こそが、関係が豊かであるということの証であり、私たちの生の豊かさの基盤ともなるものである。こうした観点からすれば、事前準備とは、学校や施設の人々の中に自然な形で身を置けるようになるためのものである。それが出会いを生み、自ずと気づきを伴う「実感」を生むのである。

学生の他者との深い出会いは実習校での授業の中で多く生まれている。実習報告でも、「実習での授業は大学で行う模擬授業とは全然違う」といったことがよく聞かれる。「模擬授業とは全然違う」と学生が言う時、二つの意味が込められている。

一つは、他者との出会いに関することである。教育実習では、生徒役の大学生を対象に行う模擬授業と違って、身体の奥深くから沸き起こる喜びの感覚、あるいは、自らの中に何かが動く感覚が沸き起こるのである。このように述べるわけではないが、生の根幹とも関わるようなこうした感覚を、直観的に感じていると思われる学生がいる。

もう一つは、授業観に関することである。一人ひとりの生徒と真剣に向き合うことで初めて授業が成り立つ、それゆえどのクラスも同じパタンで良い授業は行えるわけではないという認識を、学生たちは実習を通して獲得する。それまで大学で、少しでも良い授業を目指して準備を進め、練習を重ねてきたが、授業実践はそれとは違った次元の出来事であることに気づかされるのである。生徒たちと相互的関係に入って初めて実質的に成り立つ実際の授業体験は、これまでの体験とは全く異質なものだと感じられる。質的な違いを体験するという点で、実習は非常に重要なものである。

仏教・禅的な世界観との関連で事後指導を考える際には、通常より深いレ

ベルで起きていることに注意を払う必要がある。実習について語り合い、自分の体験を他者の視点から捉え直すことも確かに重要だ。しかし、言語化できるのは体験全体の一部にすぎない。意識化することによって経験知を利用できるようにはなるが、逆にそれに囚われてしまうこともある。経験者は必ずしも良き体験者になるとは限らない。「智慧」には物事に常に新たに出会い直す、ということが含まれている。体験の意味は固定的ではなく人生全体の中で何度も捉え直さなければならないのである。

どんな良い準備も深いレベルの現実には追いつかない。そうした現実と出会い、乗り越えて行かざるを得ない。実習校で温かく迎えられ、懇切丁寧に指導されたとしても、必ずしも深い学びにつながるわけではない。楽しい思い出で終わってしまうことがある。逆の場合にも、自分自身の生き方を省みるような深い考察へと至ることがある。また、生徒のことで学校の不幸な現実を目にして、深く考えるようになることもある。全てが在学中に良き教員像に向かう方向で乗り越えられるわけではないが、こうしたケースに出会う度、教員は、学生に内在する力とこの世界を信頼するように促される。

こうした感覚は、日常的な学生との関係でも必要だ。「教育実習指導」「教育実習Ａ・Ｂ」の授業では人並み以上の実力を有し、教育実習に送り出しても何の心配もないように見えても、いつも周囲のことが気になって自信を持てない学生や、意志が弱く周囲に合わせてしまう学生がいる。そうしたことに、教員は気づかなければならない。

教員養成ということだけに目を奪われてはならない。本学の教育の理念に基づき、学生たちの今後の人生の豊かさにつながる「何か」、「本学の教職課程を履修してきてよかった」と学生たちが心から思える「何か」を、彼らの介護等体験や教育実習体験を基に一緒に探していくのである。教師を目指さない学生も同様である。彼らにもより良い生き方を絶えず追求していくきっかけになるものを与えたい。

こうした学習を成り立たせるためには、課題がいつも外から与えられ、受

け身になりがちな今日の大学教育の在り方全体を、根本から考え直さなくてはならないだろう。グループ・ワークや演習的な授業でも、学生だけでは内容が深まらないことが多い。とりわけ問題なのは、対話的な関係になりにくいことである。遠慮があるのか、関心が薄いのか、質問も余り出ない。ましてや、相手の話をさらに引き出すような問いかけなどほとんどない。外での体験を有意義なものにするために、本来の大学教育でなすべきことがまだまだ残っている。

ところで、生全体への感受性ということは、Ⅱのテーマにとって極めて重要である。身体知と概念的知を結びつける可能性があるからである。概念的思考と体験知は、表面的には対立を含んでいる。そのため、ルソー以降の教育思想は、早期に概念的思考を強めないように説いてきたのである。子どもは心の深いところで体験し、大人に見えている世界が生きられる世界の一部に過ぎないことを告げ続けている。しかしそれは、大人には全く感じられなくなったわけではなく、かすかに残っている。生全体への感受性とは、そのかすかな声に耳を澄まし、生きられる世界への想像力を回復することである。

創造的な学問研究には直観的なひらめきが欠かせないが、日常でも、何かが本当に「分かった」と感じるのは、「腑に落ちる」ときである。

生全体への感受性の重視ということは、経済成長一辺倒ではなく、自然とその一部である人間に相応しい生き方を思い描こうとする最近の思想とも関係している。それは、教育との関わりで言い換えるならば、一般的な「社会的要請」に応じようとするだけではなく、より広く、生全体に照らして考え、内的な促しに従って行動すべきだということである。仏教・禅の精神を教師教育に活かそうとすれば、短期的というより、長期的な、また深いレベルでの効果を目指すべきであろう。

おわりに

気候変動、世界各地で起きている暴力、貧富の差の拡大、そして人間のコ

ントロールをはるかに超える規模のテクノロジー存在などを前にして、私たちはこの時代をどう受け止めたらよいか分からないでいる。そうした中、教育に以前にもまして人々は期待を抱く。いきおい、教員養成が世の関心の的となり、性急な制度改革が進行中である。本学も、公的な資金援助を得て運営されているかぎりその流れを無視することはできない。

しかし、他方で、特徴のある大学教育も求められている。教員養成も、建学の理念を生かした特徴あるものにせよ、というわけだ。この点は、望むところだ。素直にそう努力したい。しかし、そのためには、本気で取り組む覚悟が必要だ。というのは、本学の依拠する精神文化は、近代のそれと一見対立する面があるからだ。その違いを認識しながら、そこからより豊かな学問や生き方を生み出していくことが、駒澤大学が社会に存在する意味なのだろう。

というわけで、今回、試みに、皆でそうした方向を確認しようとしたわけだが、準備不足もあって、まだ論じ尽くせていないことが多い。しかし、教職課程部門の教員が個々にこれまでやってきたことを分かち合う、良い機会にはなった。

付記：2014（平成 26）年度の「教職課程で学んだ感想」について

本稿では、本学の教員養成の理念に基づく教育実践の達成度を、「平成 23 年度　教員採用試験並びに教育実習等に関する調査」の「教職課程で学んだ感想」を手がかりに確認した。

教職課程では 2010（平成 22）年度入学生から新カリキュラムに移行した。教職員免許法の改正によって「総合演習」（2 年次以降）が必修から外され、「教職実践演習」（4 年次前期）が必修として新設されたため、本学では、通年科目の「介護等体験」（3 年次）と「教育実習Ⅰ・Ⅱ」（4 年次）を、半期科目の「介護等体験指導」（3 年次前期）・「教育実習指導」（3 年次後期）・「教育実習Ａ・Ｂ」（4 年次後期）に変更したのである。アンケートが行われた 2011

（平成 23）年度は、教職課程全体としては新旧カリキュラムが混在していた時期であり、資料とした感想は旧カリキュラム履修者のものである。先述の結論は現在についても概ね妥当すると思われるが、より正確には、新カリキュラムで学んだ学生を対象とする 2013（平成 25）年以降の資料の蓄積をまって、詳しく検討する必要があろう。

ちなみに、「平成 26 年度　教員採用試験並びに教育実習等に関する調査」からは、2011（平成 23）年度の調査と比較して、次のような傾向が読み取れる。

第一に、2011（平成 23）年度では、教材研究、学習指導案の作成、模擬授業など、実習直前の準備の充実を希望したり、3 年次の教科教育法の授業の充実を望んだりする感想が多かったのに対し（資料 4、分類Ｘ）、2014（平成 26）年度は、講義だけでなくグループ・ディスカッションなどの実践的な内容の授業が多くて良かったという感想が大幅に増えている（資料 5、分類 E）。また、充実した事前指導・事後指導で有益だったという、これまであまり見られなかった感想もある（同、分類Ｎ）。3 年次で「教育実習指導」指導を履修するようになったことも一因しているのであろう。

第二に、2014（平成 26）年度アンケートでは、教育や教職について理解が深まったとする感想（同、分類Ｂ）や、教育実習・介護等体験への肯定的な感想（同、分類Ｄ）が増えている。事前準備が十分であった結果、充実した教育実習や介護等体験ができたと感じられている可能性がある。

第三に、2011（平成 23）年度には 2 件にすぎなかった「大変だった」という感想（資料 4、分類Ｘ）が、2014（平成 26）年度には 10 件以上になっている（資料 5、分類M）。自分自身が人間として成長できたという感想（同、分類Ｊ）、また、社会人として生きていく上で有意義なことを学べたという感想（同、分類Ｋ）が前よりも増えている一方で、「一言では説明できないくらい大変だった」、「専門科目との兼ね合いや抽選等によって履修が組めず大変だった」など、「苦労」のみを訴える感想（資料 4、分類Ｘ）も複数あるのであ

る。こうした現象をどう受け止めるべきか、今後、検討が必要である。

最後にもう一点、気になる変化に触れておきたい。それは、教育実習に行って、あるいは学生同士の意見交換によって視野が広がったという感想は増えているものの、2011（平成 23）年度アンケートに多かった次のような感想があまり見られなくなっていることである。「普通の授業とは異なって、『なぜなのか？』という、自分で考える力がより身に付いた」、「教育という切り口から、世の中の社会状況、変化、諸問題などを考えたり学んだりすることができ、私自身の視野が広がった」、「教育に関する考えが変わった」という感想である（資料４、分類Ｆ）。

旧カリキュラムでは、「総合的学習の時間」の新設と対応する「総合演習」という必修科目があり、多面的な観点から人類が直面している現代の諸問題について学ぶことになっていた。本学では、「総合演習Ｉ～Ｖ」として、「環境・地域」、「生活・人権」、「福祉・ボランティア」、「健康・人間」、「国際理解・情報」というテーマで、学部学科を越えた少人数の演習形式の半期科目を多数コマ開設し、それらの中から２単位以上を履修することになっていた。だが、教育職員免許法の改正に伴い「教職実践演習」が新設され、「総合演習」が選択科目となったため、現在開講されているのは４コマのみである。本学の教員養成において教育実習に向けた準備学習は充実しつつあるが、他方で、教職課程履修生の視野が狭まり、学校教育に関わる事象にのみ限定されがちな傾向があるのではないかと懸念される。

資料１　大学としての教員養成に対する理念、設置の趣旨等

（2010（平成 22）年の文科省実地視察資料）

駒澤大学が教員養成において目指しているのは、日本の中学校・高等学校の教員に不可欠な力量に加えて駒澤大学出身者としての良さを備えた人材の育成である。

中学校・高等学校における教科教育及びその他の教育に関する専門的知識・技能を十分に備え、深い人間理解にもとづく高いコミュニケーション能力を有し、生徒の全人間的な成長に支援的に関わることができるとともに、生徒が当面している事態を的確に把握し対応できる臨床的な能力を有する人材、さらに家庭や地域との連携も発展させることのできる人材の養成である。

『中学校学習指導要領（平成 20 年 3 月告示）』・『高等学校学習指導要領（平成 21 年 3 月告示）』の「総則」にあるように、教員には、教育活動全般において、生徒の個性を尊重し、生きる力を育み、人間として調和の取れた存在へと育っていくようにするための援助が求められている。教科指導においては基本的知識・技能の修得、思考力・判断力・表現力・主体的に学習に取り組む態度の育成が、また、道徳の指導においては、教員と生徒・生徒と生徒の関係を深めること、自然体験や職場体験やボランティア等の機会を提供するなどが求められている。道徳には、生徒が豊かな心を持ち、生命・人間・伝統・文化・自然環境・他国等を尊重し、社会秩序や勤労を重んじ、未来を切り開く主体性のある日本人として育っていくことが含意されている。本学が目指すのはこうした重責を担える人材の養成である。

駒澤大学の建学の理念は、仏教の教義並びに曹洞宗立宗の精神を大学教育に生かすというものである。それは、すべては関係の中にあるという事実に気づくことが他者の尊重と自律的な人生の創造につながるということと、日々自己研鑽に努め他者に貢献することは自己を生かすことに他ならないということとを基盤として教育を行うことである。この理念は本学教職員に共有され、日常の教育活動に生かされている。また、１年次必修の「宗教と人

間」（４単位）や入学式等で配布される建学の理念に関する冊子は、こうした関係論的・実践的な発想に学生が直接出合う機会を提供するものである。

この理念は、上記の道徳の指導力ととりわけ密接な関係を持つが、上記の諸課題全体に関係するものである。この理念は、現に私たちが取り結んでいる関係に注目しその質を高めようとするものであり、一旦体得されればあらゆる場に浸透する性質のものである。したがって、それは、教員としての専門的知識・技術とあいまって教育実践に必要な鋭敏な感受性と柔軟な知性をもたらすことが期待されるものである。

駒澤大学には、伝統的な領域から今日的な領域までさまざま専門性をもつ学科があり、それぞれの特徴が教員養成に反映されるが、広い視野と柔軟で実践的な知性をもち、日常を大切にし、努力を惜しまず、生徒とともにあることに喜びを感じることができる教師の育成を目指す点では共通している。

大学院の教員養成の理念も同様であるが、専修免許取得者として、教科指導に関わるより高度な知識・研究能力を有するのはもちろんのこと、教員に必要なその他の力量も十分に備えた人材の育成を目指している。

このような教員養成を実現するために、本学では、教育職員免許法・施行規則に定められた「教科に関する科目」と「教職に関する科目」の充実に努めている。殊に、「教職に関する科目」では、大人数の一方的な講義ではなく、学生と教員の間で双方向的なやり取りができ、グループ活動・研究発表・討論なども可能な規模のクラス編成にするよう努めている。また、教育実習及び介護等体験ついては、学科ごとにクラスを編成し、事前・事後指導を含め、学生一人ひとりに対し教員が責任をもって指導・支援を行う体制をとっている。また、選択科目を多数開講しており、教職に関する幅広い専門的な知見を得ることができるようにしている。さらに、授業以外の関わりにおいても、学生一人ひとりのニーズや状況に応じて、教職課程としてきめ細かく対応する体制をとっている。

また、全学の理解と協力のもとに教員養成を行うための組織として、教務

部長を委員長とする教職課程運営委員会を設置している。

駒澤大学の建学の理念は、要するに、実践的で柔軟な知性を持った人材を育て社会に送り出そうというものである。それは、大学全体が目指していることであるが、とりわけ教員という職種で求められていることである。本学の建学の理念が真に教員養成に生かされるなら、環境問題やグローバル化の中で生じた様々な問題、課題を抱えた今日の社会に十分な貢献ができるであろう。

資料2　教職課程部門開講科目における少人数クラスの割合

年度	教職課程部門主管の総コマ数	少人数クラス（40名以下）のコマ数	割合（%）	
2007（平成19）	172	75	43.6	
2008（平成20）	174	87	50.0	注(1)
2009（平成21）	174	94	54.0	
2010（平成22）	172	107	62.2	注(2)
2011（平成23）	166	97	58.4	注(3)
2012（平成24）	167	81	48.5	注(4)
2013（平成25）	177	94	53.1	注(5)
2014（平成26）	173	105	60.7	

※　教養教育科目（全学共通科目）としてのみ開講されている「教育学」・「教育心理」・「新入生セミナー」は、除外して計算した。

※　少人数クラスの割合に影響する要因としては、教職課程の履修者数の増減の他に、次の点が考えられる。

注(1)　2008年度より、「教職に関する科目」に属する「教育の思想」および「教育と社会」を教養教育科目の対象から外し、教職課程登録者のみが履修できる科目とした。また、「総合演習」が40名以下のクラス編成となるように抽選による1クラスの履修人数の調整が行われるようになった。

注(2)　2010年度入学生から、新カリキュラムが導入された。

注(3)　2010年度入学生から、「総合演習」が従来の「教職に関する科目」（必修）から「教科又は教職に関する科目」（選択）に変更されたことに伴い、2011年度以降、「総合演習」（少人数クラス）の開講コマ数を段階的に減らした。

注(4)　2012年度より、「教育実習指導」（学部学科配当）を開講した。

注(5)　2013年度より、「教職実践演習」（少人数クラス）を開講した。

資料3　4年次末アンケート「教職課程で学んだ感想」一覧（2011年）

NO.	分類	質問項目「教職課程で学んだ感想を自由にお聞かせください。」への回答
1	A X	2年生の頃の授業は楽しかったです。3年生の頃の授業はあまり参考にならなかったような気がします。
2	A	とりあえず大変だった。しかし、学部だけでは学べないことが多かったし、自分の中でとても有意義なものとなりました。
3	A	3年間、＋α のカリキュラムを取らなければいけない部分に関しては正直しんどい時もありましたが、色々学ぶことができました。
4	L X	実際教員になったときに役立つ内容だったのか疑問に思う点がある。親身に相談できる先生が多かったのはありがたい。
5	A	たいへん勉強になった。
6	B	教員になるにあたって基本的な知識が学べた。
7		（未記入）
8	K X	教職以外でも活かせるような内容があったので有意義だった。ただ、もう少し採用試験向けのものも欲しかったとは感じた。
9	X	教員採用試験に密着した内容も扱ってほしかった。
10	H	生徒との対応を事前にシミュレーションできたのは良かった。もっと専門知識（児童心理など）を深めたいと思う。
11	B J	教育に対する知識を身につけられらだけでなく、自分の在り方を考えさせられるような授業に出会えてよかったです。
12	B	自分が小学校から受けてきた教育は、どういう狙いがあって行われてきて、これからどうなっていくのかという事が分かり良かった。
13	C	教員になりたいきっかけになった。
14	A	授業時間が通常より多く大変だったけれど、貴重なことを多く学べました。
15	F	普段の授業とは異なって、「なぜなのか？」という、自分で考える力がより身に付いたと思います。自分は教員志望ですが、そうでない人も充実していたと思います。
16	L	教職を目指す人が少ない中で（大学内において）、目指している友人や、支援して下さる先生方や職員の方に会えてよかった。でも免許だけを取ろうとしている人で出席状況や授業態度もあまり良くない人がとても多い気がした。
17	B	人に教えるということの難しさ、大切さなど、教員という職業の偉大さを感じました。
18	L	自分の大学生活で、「これだけはしっかりやり通したい」と意志を持って望んだ課程であり、先生も他の生徒もやる気があって、同じものを目指す独特の熱気があって、とても良かったです。刺激をもらいました。
19	A	取得する単位も少なくないので大変であったが、教職の授業でしか学ぶことのできない内容も多く、良い経験となった。
20		（未記入）
21	B X	授業や指導案の作り方の基本が学べた。3年生で教科教育法の授業があるが、それ以前（1、2年生）の段階で公立、私立の採用試験の情報をより具体的に掲示したり、授業を作らせたり、発表させることをさせる方が、より教員になる上で具体的なイメージをもてるのではないかと思った。

22	B X	教育法では、教育実習に役立つことを学ぶことができたが、その他の講義では、もう少し採用試験の対策になるようにしてほしかった。
23	B	色々な先生方の研究内容が今の教育の現状と大変合致していて良かった。
24	B H	学校への視点の変化とコミュニケーション力。
25	X	特に試験に役立つとは思えなかったが、教職係のみなさんの対応がよかったのでスムーズに単位がとれた。
26	A B	教員になるために必要な知識と心構えを学ばせてもらいました。楽しく学べた3年間でした。
27	L	ポイントを押さえることができた、提出した課題にもアドバイスを書いて返却して下さった先生もいたので、復習できたし、「もっとこうしてみよう」と意識することができた。
28	X	色々と考え方の異なる先生方がいらっしゃったと感じました。また、模擬授業をする授業をもっと増やした方が、実習に向けて良いと思います。
29	C	教師を目指すために自分に何が足りないかを理解できた。一度社会に出て教師になる力を身につける。
30	B	理論に関する講義は教職に対する理解を深めるのにとても役に立った。
31	G B	学ぶ側から教える側にたつ大変さ、やりがいを学ぶことができてよかったです。
32	X	教科教育法の授業をもう少し充実させるべきだと感じました。人によって模擬授業なしで実習した人もいたので。
33	A	教師を目指している自分にとっては、非常に有意義な勉強でした。
34	H	介護等や教育実習で普段あまり関わらない方とたくさん関わることができてとても勉強になった。
35	B	教育という仕事について良く学べた。思った以上に大変そうだが、やりがいのある職業だと思う。
36	H	人とのコミュニケーションの取り方や接し方など、介護等体験や教育実習で様々な人と接して、いろいろ考えさせられました。
37	A J	面白かった。一度卒業後、科目等で戻り、受ける大学の講義は面白かった。特に、教育心理系の科目は、自分と向き合う良い機会になった。
38	X	教員免許や教員採用は複雑なので、教員採用専門のキャリア・カウンセラーを設置してほしいです。
39	E	講義だけでなく、実践的な内容の授業が多くてよかった。
40	E L	模擬授業をし、実際の授業を想定し、授業を作り上げるということができたのが、とても有意義だった。また、実習後の報告会も色々な人の様々な経験や意見を交換することができて、とても参考になった。
41	A K	教員を目指してとったが、本当に為になった。一般企業に勤めるに当たっても、大切な知識が多くあると思う。
42	G	今まで教えられる立場だったが、教える立場として考えることができるようになったのでよかったです。
43	B	最初の頃は教育とはどういうものかあまりよくわからなかったのですが、教育の勉強をして、教育の重要さが理解できた。
44	E	模擬授業を見るのもやるのも勉強になりました。1人で考えるだけよりも、実際に前に立って授業をやる方が気付くことが多々あり、教育実習に行く前（3年次）にも、後(4年次）にも機会があって良かったです。

45	D	教育実習では実際に子どもたちと接することで、非常に貴重な経験ができたことに感謝しています。
46	B	人に伝えるとは何かを学び、有意義だと思いました。
47	X	実習直前の準備に関して、授業でもっと時間を割いてほしい。
48	A	指導内容が明確であったので、何を学んでいるかがわかった。
49		（未記入）
50		（未記入）
51		（未記入）
52	H K	教職に就く就かないにかかわらず、人間関係の在り方など、自分の人生を生きていく上で有意義なことを学ぶことができた時間だったと思う。
53		（未記入）
54	B X	幅広い分野から教職に関して学べてよかったです。しかし、介護等体験の授業自体は1年間は長すぎるように思えました。
55	B H K	人とのふれ合いや物事の伝え方について学習することができ、一般企業で働くにしても役立つことを得られたと思う。
56	D	授業が多くて大変だったが、教育実習は貴重な体験だった。
57	L	教員採用試験、教員になるに当たってあまり役立った気はしませんが、一生懸命頑張ってくれる先生も2人くらいはいて、それは勉強になりました。
58	D B	教育実習が一番印象に残った。これまでに机上で学んだこと以外の教員のやりがい、楽しさ、辛さなど多くのことを学ぶことができた。
59	B	現在の教育の現況など知ることができ、模擬授業など授業の大切さなどを学びました。
60	B X	専門分野のみならず幅広く学べた。もう少し早い時期に模擬授業等実践的な経験をしたかった。
61	B H	「教育」において現場の状況を知り、教科指導と生徒指導にて生徒とコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことが重要であることを学ぶことができた。
62	F L	考え方には様々な方法があるなということを学びました。体験談などの機会があったので参考になりました。
63	B	教職の授業は思っていた以上に大変だったが、その中で教職における責任の大きさを学ぶことができた。
64	B F	子どもを取り巻く教育というものを学び、現状を知ることが出来たし、教育に関する考えが変わったと思う。
65	A	私は地理、歴史、公民、中学社会、商業と4つの教科の免許を取る予定です。とても大変でしたが、多くのことを学ぶことができ、とても勉強になりました。
66	X	実践的な授業を学びたいと思いました。（例）指導案、模擬授業、教材研究の仕方など。
67	H B	コミュニケーションの大切さ、教えることの難しさを実感しました。
68	H B	人のつながりの大切さ、教えることの大切さ、実行することの大切さを学べた。
69		（未記入）
70	A	教員になるならないを問わず、貴重な経験をすることができた。
71	A	興味深いことがたくさんあって楽しかった。

72	B K	教育について理論から実践まで2～4年生でたくさんのことを学ぶことができました。これからの人生に生かそうと思います。
73	B	人にものを教えるのは大変だということを学んだ。
74	A	色々と大変なこともあったけど、授業は楽しいものが多かったです。
75	A	大変勉強になった。
76	L B	親身になって相談にのっていただきました。今まで受けてきた学校教育の裏側を知ることで先生方の苦労を理解するとともに多くの人々の試行錯誤の上に成り立っている教育を実感することができ、大変有意義でした。
77	F	指導の仕方に正解はなく、一人一人の意見が違うものなので、他の人の意見を聞くことで自分の視野も広がりました。
78	F K	教育と一言でいっても、様々な向きからのアプローチがあったりして、将来教員にならなかったとしても素晴らしい経験になった。
79	D	教育実習など、一般の企業では学ぶことができないことを学べたことがとてもためになりました。
80	X	忙しかったです。
81	X	もっと実践的な授業が多い方が為になると思った。知識的な事も大切だが、そこを使えるかと言われると心配になる。
82		（未記入）
83	B	教師になるための道のりの険しさを理解できた。
84	A	様々な知識や経験が得られて良かった。
85	I	とてもプレゼンテーション能力がついた。
86	L E	色々な学部の人と知り合えて、交友関係を広げることができた。学習指導案の書き方や様々な授業方法を見ることができて、授業の展開方法の幅を広げることができた。
87	B D	教職課程の授業を通して、人や心の成長について、そして実習で本当に貴重な経験をさせていただいた。
88	A	率直な感想として学部の授業よりも面白かった。単位を落とさないよう真面目に毎回参加したのも大きかったと思う。
89	K	教員になるためだけでなく、社会で使えることが多かったので、とても勉強になりました。
90	K H	教員の為だけではなく、この先の社会人としての大切な事を学べ、人に教えること、それだけでも難しいが教師はそれ以上に生徒の為に動いていて良い経験でした。
91	H	教科の専門的な知識を学ぶのも大切なことであるが、生徒に対してどのような対応をすべきかということについて学んだことが自分のためになったと思う。
92	B	教えることの大変さと責任。
93	X	表面的なものが多いと感じた。実際のイメージ（リアルな）があまり無かった。
94	L	学部の授業より興味を持てるクラスが多かった。
95	X	教職・教育学を専門としていない先生が多く、ズレた授業が多かった。本当に必要とされているものを教えられる授業をつくれるように勉強してきて下さい。
96	F H	“誰か”の人生、しかも多感な時期に直接的に関わることができる喜びを感じることができ、教員に対するイメージがかなり変わった。
97	B H	生徒たちへの対応やどのように教えていけば生徒にわかりやすく楽しく教えられるかを学べてためになった。

98	A	とてもためになったと思います。いろいろな勉強をすることができてよかったし、知識も増えたと思います。
99	D E	1、2年時はただ授業を聞くことが多かったのですが、3年、4年と模擬授業など実技が増え大変でした。しかし、実習に行き、何か一つでもつめあとが残せたことは教職課程を学んでいて良かったと思いました。
100	F C	今までとは違った観点から物を見ることが出来るようになって良かった。また、教員という職が自分にはあわないと知ることも出来た。
101	B C	教員という職業の大切さ、大変さを実感すると共に、自分の中にある教育に対する想いを形にするためのスタートラインに立てたと思う。
102	F	“教師”に対する意識が大分かわった。モンスターペアレンツになることはないだろうなと思う。
103	X	大変でした。
104	A	科目の先生によって良し悪しが大きく分かれるが、教職課程は自分のためになった。
105	B	はじめは教員になるための資格をとるという軽い気持ちで授業に臨んでいたが、教職課程は奥が深く、教えることを通して、色々なことを学ぶことができた。
106	F	教育の切り口から、世の中の社会状況、変化、諸問題などの面を考えたり学ぶことができ、私自身の視野が広まった。
107	J	自分を成長させてくれた。
108		（未記入）
109	X	担当教授によって授業の内容が違いすぎたため、受ける側の知識に差が出る。
110	A	大変ながらも充実していたと思います。
111	B	塾でのアルバルトをしていたため、学校と塾のやり方、考え方の違いが一番勉強になった。
112	K	企業に就職しても教育をする機会はあるので大切なことを学べたと思います。
113	X	「知識」として、体験談や国語の歴史、介護等体験の時にしていい事としてはいけない事等は学べたが、「実践」としては時間が足りなかったと思います。
114	A	つらいことは多かったけど、自分にプラスになることをたくさん学べたと思う。
115	B	人に物事を教えることの難しさ、楽しさを知ることができた。
116	J	一人の大人として成長することができた。
117	A	教育実習や教職課程の授業はとても有意義で、大学生活の中でとても貴重な時間となった。
118	B K	人としてとても大切なことや学校教育の総まとめの様な事を思わせられる課程でした。
119	F	教育という漠然とした分野が、少しではあるが様々な視点から考えられるようになった。
120	B	今まで教えられる側にいたので、教えることに対して深く考えていなかったが、実際に発表や実習を通して、教えることの難しさを学んだ。
121	A D	普段の授業では絶対学べないことなので、たのしかったです。実習も大変でしたが、社会勉強になりました。
122	H K	“教師として”だけでなく人との関わりや度胸など多方面で得られるものがありました。
123	A	他の人たちとは学ぶ事がちがったけど、とても勉強になりました。

124	B H	教員という立場から子どもと関わる技術を学べたと思います。
125	A K	ためになり、今後に生かしていきたい。
126	B	学校の現状。
127	A	大変なことも多かったですが、とても自分にとってよい経験でした。
128	B	発達障害etc.の理解は今後教員にならないとしても役に立つと思いました。
129		（未記入）
130	X	来年度も学ぶ予定であるが、先生方の中で敬うことができる方と拒絶してしまう方もいた。教職という事に限らず、先生方にも考えてほしいこともある。
131	A K	途中から教員になる気はなくなりましたが、通常では学ぶことのできない体験をさせていただいて、これからの糧になりました。
132	X	無駄な授業が多い。
133	B	人にモノを教えることだけが教職者の役割ではないこと。
134	B	教員になるための勉強というよりも現在の教育の話なので、「教育」全般のことを学べた。
135	B	人に何かを伝えることの難しさを学んだ。
136		（未記入）
137	B	これといって記憶に残っていることはありません。しかし共通して思ったことは、教員になることは大変だということを痛感させられました。
138	H	対人関係におけるコミュニケーションの基礎を論理的に学ぶことができた。
139	B	人に伝えることの難しさや喜び、生徒指導以外の部分での大変さといった本来の教職の実態を知ることは、机上の学習では出来ないと思いました。
140	H	学生（生徒？）としての視点で物事を深く見れるようになった。
141	A	教職課程の授業はためになることが多く、自分の学部の授業より楽しかった。
142	D	教員にはならないが、教育実習などで非常に良い経験ができた。
143	L H	他の授業より自由に発言できる機会が多く、クラス内のコミュニケーションがとりやすかった。
144	D	元々、教員になるつもりはなかったが、教育実習はすごく面白かった。その他の教職課程の授業は面白くなかった。
145	B	人を育てることの大切さ、難しさを学んだ。教科を教える以外にも、教員には行うべき指導が多くあると知った。
146	B	教職を取っていない友達より忙しく大変だったが、教育の現状を学び、それを実習に活かすことができてよかった。
147	B	自分の考えているよりも、授業をするという事も大変だけれど、その授業を作り上げていくまでの過程がとても大切だし、大変だと思った。
148	B	人前で話すことの難しさと事前準備の大切さを学びました。
149	B	学科の授業では教わることができなかった“若者の居場所”や“障害をかかえていることについて”などを知り、考えることができれとても有意義なものだった。
150	H	人と向き合う仕事の基礎を学んだと思う。
151	A	教職では、学科では学ぶこと以外の多くを学び得られたと思う。忙しい時を過ごした分だけ、充実した日々が送れた。

152	L F	学科での授業とは異なり、様々な学科の学生と共に学ぶことで、新しい価値観を共有できたり、大いに勉強になった。
153	J	教職課程で学び、自分自身が人間的に成長できたのではないかと思います。
154	F	様々な講義を履修でき、視野が広がったかなと思う。
155	D B	教育実習はすごく楽しかった。実習に行くことで教師という職業の大変さややりがいについて理解できたのがよかった。
156	J	学科の兼ね合いで大変な場面も多くありましたが、教師としての学びよりも、自分自身が生徒としての学びを振り返ることが多くありました。
157	F	様々な観点から学ぶ事ができ、授業の種類、先生も多くて興味が深まる一方だった。もっと、学びたいと思った。
158	F K	教員について学ぶことで視野が広がったと思う。教員以外の場面で活用できる知識を多く学べた。
159	F	自分の学部以外にも、教育や幅広い分野の知識を多角的にとらえる視点を持てたことは、ためになったと思う。
160	K	教員にならないとしても、これから社会に出る私にとってすごく勉強になったと思う。
161	B C	教師としての基本的な考え方、あり方を学び、その上で自分が教員としてやっていく為の能力や知識・方法を考え、実践することができた。
162		（未記入）
163	X	単位のとり残しなど起こりそうで良くない。しっかり指導すべき。
164	A	二度とない貴重な経験をすることができました。
165	D	「先生」と呼ばれる事はこの先、なかなかないと思います。本当に貴重な体験でした。実習に行けて良かったです。
166	D K	とても多くのことを学んだと思う。特に教育実習では中々体験できないことを体験できたと思う。この経験を忘れることなく、今後の人生に活かしていきたい。
167	A	教師になるにはいろいろと犠牲が多かったが、とても勉強になった。
168	B H K	わかりやすく教えることの難しさを学びました。また、生徒との信頼関係の築き方を学べてよかったです。自分の人生のためになることが多かった。
169	A	とてもいい経験になった。普通では絶対に体験できないことなので教職課程をとって良かった。
170	B	人に伝える、教えるということの素晴らしさと難しさ、現状の学校について。
171	B	教えることの楽しさを学べてよかったです。
172	X	理論重視だったので、もっと、グループワークや模擬授業以外の実践が必要だと思う。
173	I G	多くの人の前で話すことができるようになりました。授業を聞く側と逆の立場で出来て良い経験になりました。
174	H K	お客様（生徒）の為に考え、行動する事の大切さ。そして、これは学校以外の場でも通ずる事であるという事。
175	X	もっと教職の授業を履修して、教育実習に行くまでに、教科に関する科目（地理・歴史）の勉強ができたらよかったと思います。
176	B	教えることの難しさを知ることができました。
177	C	教職課程で学んで、自身の資質のなさや、足りない点がはっきりしたので良かった。これからは、どんな形であれ、「教育」のことを考えながら過ごしていきたい。

178		（未記入）
179	A	小学生のころから、教師という職業に興味があったので、教職課程を履修したのですが、科目数が多くて大変でしたが、本当に様々なことを学ぶことができ、貴重な経験になりました。
180	A D	他の人が学べない多くのことを学ぶことができて大変よかったです。また、私は母校に教育実習生として戻りたいと強く中・高在学の時から願っていたので、とてもうれしかったです。
181	B	生徒に授業をすることは難しいと感じた。
182	H	人はコミュニケーションをとることで成長できるので、人との関わりは決しておろそかにしてはいけないと学んだ。
183	H	今まで習っていたことを教える側として学んだので、良い経験になりました。英語という科目だけではなく、読書等で「学ぶ」ことがどれだけ重要か気づかされました。
184	E	予め指導案の作り方を練習できたのでよかった。もう少し細かいところまで指導してほしかった（LとRの発音とか）。
185	B I	教員になる上で必要な知識だけでなく、プレゼンや事前準備の重要性など、多くのことを学べ、勉強になりました。
186	B K	教授法はもちろんであるが、それ以上に道徳的な要素を含む授業が多かったので、心が豊かになった気がした。
187	X	どんなに授業の準備をしても、HRなど授業時間以外のことは不測のことばかりでした。
188	A K	今までとは違う、普通の場面では経験できないことをすることができた。今後の人生でも活かすことができる。
189	A B D	実際に教育実習に行ったことで、どれだけ人に教えるのが大変なのかということを痛感した。普段の学生生活では味わえないことを体験できた。
190	A B	教師になるためにはどのようなことを心得て、知っておくべきなのかということを学べた。貴重な経験ができた。
191	B	教員になるためではなく、教育についてとても参考になる講義を聞くことができた。
192	A	どの科目も新鮮で楽しく学ばせて頂きました。有難うございます。
193	F	教育に対する考え方、姿勢というものを、自身の中で改めて構築するキッカケとなりました。
194	X	上記に名前を書かせているため、自由に書くことは不可能です。
195	B K	教師の心構えや仕事内容を学び、これからその職についても、そうでなくても、人生に役立つことを学べたと思います。

資料4 「教職課程で学んだ感想」分類別件数（2011年）

分類	質問事項「教職課程で学んだ感想」の回答	件数（件）	割合（%）
A	大変だったが、授業は楽しかった。貴重なことを多く学べ、有意義なものとなった。	39	20.0
B	次の点から教育や教職について学び、理解を深めたり習得することができたりしてよかった。 ・理論から実践まで幅広い分野にわたって教育全般のこと、教育の重要さ、教育の現況etc. ・学校教育の現状とあり方、学校への視点の変化、学校と塾との違いetc. ・教師の仕事の大変さ・責任・やりがい・楽しさ、人に何かを伝えることの意味・難しさ・喜びetc. ・教師になるために必要な基本的な知識や心構え、技能etc.	63	32.3
C	教師になりたいきっかけをつかんだ。教師を目指すために自分に何が足りないかがわかった。	5	2.6
D	教育実習を通して、二度とない経験をすることができた。	14	7.2
E	講義だけでなく、実践的な内容の授業が多くてよかった。	6	3.1
F	様々な観点から学び、他の人の意見を聞くことで、視野が広がった。「教育」や「教師」に対するイメージや考え方等が大きく変化した。自分で考える力が身に付いた。	16	8.2
G	今まで教えられる立場だったが、教える立場として考えられるようになってよかった。	3	1.5
H	人のつながりの大切さ、人間関係のあり方を学べた。コミュニケーション力が身に付いた。	23	11.8
I	プレゼンテーション能力が身に付いた。多くの人の前で話せるようになった。	3	1.5
J	自分と向き合うよい機会になった。自分自身が成長できたのではないかと思う。	6	3.1
K	生きていく上で有意義なことを学べた。教員になるためだけではなく、この先の社会人としての大切なことを学べ、とても勉強になった。	21	10.8
L	クラス内の交友関係、教師との関係が良好で、学びの上でプラスになった。	12	6.2
X	教職課程への要望、その他の感想。	27	13.8

※ 「教職課程で学んだ感想」は、「平成23年度　教員採用試験並びに教育実習等に関する調査（平成23年11月）」に基づく（詳しくは、本文参照）。アンケート対象者：平成23年度教育実習終了者265名、回答者：195名。

資料5 「教職課程で学んだ感想」分類別件数（2014年）

分類	質問事項「教職課程で学んだ感想」の回答	件数（件）	割合（%）
A	充実した講義を受けられた。どの授業も面白く、楽しく学べた。学生生活が充実した。自分のためになった。	21	9.4
B	次の点から教育や教職について学び、理解を深めたり習得することができたりしてよかった。 ・理論から実践まで幅広い分野にわたって教育全般のこと、教育の重要性、教育に対する考えetc. ・学校教育の現状、現代の子どもが抱える問題etc. ・教師の仕事の大変さ・責任・やりがい、人に何かを伝えることの大切さ・難しさ・楽しさetc. ・教師になるために必要な基本的な知識や心構え、技能etc.	100	44.8
C	将来、教員になりたいと強く思わせてくれる機会を与えてくれた。自分が教員として何が必要かを日々探ることができた。	8	3.6
D	教育実習がかけがえのない経験になった。介護等体験が人生の糧になった。様々な体験・実習を経験したことで視野を広げることができた。実習は楽しかった。	42	18.8
E	実際に教育現場に出たときに実践できるもの（ex.パソコンの使い方、授業方法、学習指導案の書き方）を学べた。模擬授業や学生間での意見交換を活発に行うことができた。少人数制やディスカッション形式がとられているので、自分の考えを整理しやすい。	17	7.6
F	幅広い知識を多角的に学ぶことができ、視野が広がった。教育という答えのないものに対して、自分なりの考えを持つことができるようになった。多様な意見の中で自分の教育観を確立していくことの楽しさを学んだ。	13	5.8
G	教える立場になった時の行動や考え方などが学べた。相手（生徒）のことを常に考える状況にいることで、様々な視点で物事が考えられるようになった。	11	4.9
H	人が人と接していくことの奥深さを再認識した。コミュニケーション能力が身に付いた。生徒との関わりの大切さ、生徒への接し方を学び、考えることができた。	20	9.0
I	人前での発表の能力が鍛えられた。人前で話すことが出来るようになった。	5	2.2
J	自分について深く見つめ直すことができた。自分の成長につなげることができた。人として豊かになった。人格的に磨かれた。度胸や自信がついた。	12	5.4

K	全ての人に通ずる充実したものだった。生きていく上で大切なことを学べた。教員にならなくても、今後の人生に生かしていくことができるもの（ex.人との関わり方、物事の伝え方、社会人としての責任感）を学べた。	36	16.1
L	同じ夢に向かって共に授業を受ける仲間から刺激を受け、普通の授業では学べない数多くのことを学べた。学部・専攻を超えたえた交流が行われた数少ない場として有益であった。先生方が親身になってアドバイスをくれ、最後まで全力でサポートしてくれた。	13	5.8
M	一言では説明できないくらい大変だった。学部との両立が大変だった。修得すべき単位が多く大変だった。免許取得のために、がむしゃらに頑張ってきた。	15	6.7
N	（教育実習や介護等体験など）事前指導・事後指導がしっかりしていて、得難き体験をすることができた。教育実習に臨むための準備を行うことができた。	5	2.2
O	教職実践演習で、現代の教育問題について学生同士でじっくりと考えるよい機会になった。	1	0.4
X	教職課程への要望、その他の感想。	30	13.5

※ 「教職課程で学んだ感想」は、「平成26年度　教員採用試験並びに教育実習等に関する調査（平成26年11月）」に基づく。アンケート対象者：平成26年度教育実習終了者230名、回答者：223名。

※ 資料4、資料5の分類上の各テーマは以下の通りである。

A. 学び一般・学生生活の充実
B. 教育・教職に関する学び
C. 教職への動機づけ
D. 教育実習・介護等体験
E. 実践的な内容の授業
F. 視野の広がり・価値観の変化・考える力の習得
G. 教える立場の視点からの学び
H. コミュニケーション力
I. プレゼンテーション力
J. 学生自身の人間的成長
K. 社会人として生きていく上での学び
L. 多様な交友関係・教師との良好な関係
M. 履修の大変さ
N. 事前指導・事後指導の充実
O. 教職実践演習

なお、分類Xの教職課程への要望やその他の多様な感想の考察については、今後の課題としたい。